様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：25502
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520187
研究課題名（和文）　山口に現存する鷺流狂言の系統的研究

研究課題名（英文）　A Study of the School of Yamaguchi Sagi-ryu Kyogen

研究代表者
稲田　秀雄（INADA　HIDEO）
山口県立大学・国際文化学部・教授
研究者番号：80264969

研究成果の概要（和文）：山口市に伝わる鷺流狂言の台本（江山本・春日庄作自筆本）に収める曲目の分析を行った結果、それらは基本的に鷺伝右衛門派の特徴を有するものの、曲目によっては、中央（江戸）の鷺伝右衛門派とは異なる詞章・演出（他流・他派と一致する例も含む）が部分的に見出された。すなわち、長州藩の狂言の流れを汲む山口鷺流狂言は、必ずしも中央の鷺流の単純な継承ではなく、独自の工夫を加えた可能性があることが判明した。

研究成果の概要（英文）：Concerning the Kyogen texts of Yamaguchi Sagi-ryu, we considered the following points of the system of play script : 1) These texts fundamentally have distinctive features of the Den-emon branch of the Sagi school. 2) Some parts of these texts, however, are like those of another school.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1000,000	300,000	1300,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2300,000	690,000	2990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：中世文学　狂言

１．研究開始当初の背景

(1) 現在、山口市に伝承されている鷺流狂言（山口市指定無形文化財）は、長州藩抱えの狂言役者であった春日庄作（しゅんにちしょうさく）（1816～1897）によって、明治期に伝えられたものである。鷺流は、大蔵流・和泉流と並ぶ狂言三大流儀の一つであり、その宗家は江戸幕府に抱えられ、江戸期を通じて、狂言方としては筆頭の扱いを受けていたが、明治維新の混乱によって急速に衰微し、明治 28 年（1895）には宗家が絶え、プロの流儀としては滅亡に至った。しかし、奇跡的にその芸流は絶えることなく、現在、山口県山口市と新潟県佐渡市真野町に素人の演じる狂言として残存している。

(2) 以上のような経緯により、山口市には鷺流狂言の台本（役者による筆写本）が数多く伝存している。鷺流の元祖というべき春日庄作の直筆による台本をはじめ、その弟子たちによって書写された中西本・河野本がその中心をなしているが、長州藩狂言方六家のうちの一つであった江山家の台

本と推定されるもの（江山本、江戸末期書写と推定される）や下関市長府の狂言役者であった浜田家に伝わった台本（大正期書写）もある。これらの台本は、現在、山口県立大学附属郷土文学資料センター、山口市歴史民俗資料館、その他の山口市内諸機関に所蔵されている。

(3) 山口鷺流狂言は、1997 年に文化庁より「記録作成の措置を講ずべき無形の文化財」の指定を受け、2001 年に、同庁より認められた「伝統文化伝承総合支援事業」として、鷺流狂言記録作成委員会編『山口鷺流狂言資料集成』（山口市教育委員会）が刊行され、山口市に伝存する鷺流狂言台本が網羅的に翻刻・紹介された。申請者は、記録作成委員会のメンバーとして、山口鷺流狂言保存会の全面的な協力と連携のもとに、前掲書の編集作業の全過程に関わった。しかしその後、本書に翻刻された曲目の内容（詞章・演出）に関する系統的な分析は、いまだ十分に行われていないのが現状である。周知のように、狂言の台本は時代によって大きな変遷があり、その内容は流儀により、かなりの相違がある。また、同じ流儀の中でも、家による差異が無視できない場合もある。とりわけ鷺流においては、宗家系である鷺仁右衛門派と、分家系である鷺伝右衛門派との間に、詞章や演出の相違が少なからず認められるのである。山口市に伝えられた鷺流の台本についても、その所収曲目の内容分析を通じて、それらの台本が鷺流の中でいかなる位置を占めるのかという問題が、あらためて解明されねばならない。

２．研究の目的

(1) 本研究においては、山口市に伝わる鷺流狂言の台本を網羅的に調査・分析し、その台本に収められた曲目の系統的位置づけと特質を明らかにすることを目的とする。大蔵流・和泉流といった他流台本との比較、また同流の鷺仁右衛門派の台本、さらに江戸期の鷺伝右衛門派の台本との比較によって、山口鷺流に伝えられた曲目の系統的な分析を行う。

(2) 狂言は、他分野に比較して研究人口が少なく、基本的な研究がいまだ立ち遅れている部分も少なくない。例えば、狂言諸流台本の系統的調査により、詞章・演出の歴史的変遷を記述した大著として、池田廣司氏『古狂言台本の発達に関しての書誌的研究』（風間書房、1967 年）があるが、本書は、大蔵流と和泉流の台本を対象としており、明治期に廃絶した鷺流の台本に関しては全く取り上げられていない。池田氏の著書が刊行されて以後、延宝忠政本、享保保教本、宝暦名女川本など、狂言研究者によって、主要な鷺流台本の翻刻・影印の刊行がなされてきたが、そうした台本に収められた曲目の詞章・演出に関する系統的な変遷の状況は、鷺流全体の問題として、いまだまとまった研究成果となっていない。つまり、鷺流狂言の江戸期を通じての展開の様相は、基本的な曲目においても、明確でない部分が多いのが現状である。

(3) 先述のように、鷺流は明治期に廃絶したが、その台本は多く残されており、狂言自体も、山口と佐渡に、素人によって伝承されている。本研究は、申請者が研究的支援を行っている山口鷺流を切り口とするが、現在まで伝承されている芸態を出発点として、比較的立ち遅れている鷺流狂言の作品研究を押し進めるものでもあり、そのことは、いまだその系統的変遷の全貌が明らかではない鷺流狂言の近世的展開の様相を明らかにすることにつながる。

(4) 山口鷺流がその流れを汲むとされる長州藩の能楽に関する先行研究は、従来、資料の報告や役者に関する歴史的研究を中心とするものであった（竹本幹夫氏による長州藩笛方・由良家伝来文書の調査報告、同氏及び樹下文隆氏による長州藩抱えの能役者に関する研究など）。しかし、狂言関係については、いまだにまとまった研究成果がなく、江戸期の長州藩において、いかなる狂言が演じられていたか、それは中央の狂言と同じなのか、そうではないのかといった、その内容を問う研究は今まで皆無であるといってよい。そもそも長州藩に限らず、江戸期の地方諸藩における狂言の実態を明らかにすることは、まだ十分に解明されていない狂言研究上の重要課題である。本研究はこの点においても、狂言研究さらにはそれを包括する近世能楽史研究に資するものである。

３．研究の方法

(1) 本研究は、申請者も編集に加わった『山口鷺流狂言資料集成』（山口市教育委員会、2001 年）に翻刻された狂言の曲目について、他の鷺流台本（仁右衛門派・伝右衛門派）や大蔵流・和泉流の主要な台本と比較・検討することにより、その系統的な位置づけ（いかなる流派の系統であるか）を確定し、同時にその特質を明らかにする。

(2) 具体的には、まず長州藩時代の狂言を書き記したと考えられる江山本（山口県立大学附属郷土文学資料センター所蔵）所収曲（「地蔵舞」「柑子」「八句連歌」「空腕」

「文荷」「千鳥」「鐘ノ音」「蟹山伏」「朝比奈」「八尾」「節分」「神鳴」「梟」「苞山伏」「抜から」「祢宜山伏」「柿山伏」）について、『山口鷺流狂言資料集成』の翻刻本文と原本を再度照合しつつ、所収曲１曲ごとの内容について、他流台本、鷺仁右衛門派台本、鷺伝右衛門派台本と比較し、その共通性と差異を明らかにすることで、狂言台本の近世的展開における各曲の系統的な位置づけを確定し、それぞれの曲目の特質を明らかにする。その際、必要に応じて、国文学研究資料館、神戸女子大学古典芸能研究センター等の能楽関係資料を所蔵する諸機関に赴き、関連資料を調査・収集する。

(3) 以上の作業に基づく江山本所収曲の系統的位置づけと特質の解明に関する成果を研究論文にまとめ、本学紀要である『山口県立大学学術情報』(電子版)に発表する。

(4) 次に、山口鷺流の元祖・春日庄作自筆本所収曲（山口鷺流狂言保存会及び山口県立大学附属郷土文学資料センター所蔵）（「首引」「弐人り袴」「清水」「輝り」「栗焼」「地蔵舞」「呼声」「二千石」「昆布売」「八句連歌」「鬼瓦」「大盤若」「水汲新発意」「業平餅」「金藤左衛門」「蝉」「武悪」「隠シ狸」「八句連歌」「清水」「栗焼」「土筆」「柿山伏」「地蔵舞」「シビレ」「呼ビ声」「物まね」「業平餅」「千鳥」「今参り」「参宮」「宮城野」「靭猿」「以呂波」「末広り」、以上重複あり）について、前述の手法により、系統的な位置づけを確定し、それぞれの曲目の特質を明らかにする。

さらに、野田神社奉納狂言本（「颯果」「平六」「鞠座頭」「たけのこ」）、中西本（「鍋八ツ撥」「昆布売り」「凱旋」「首引」「雛聟」「呂蓮」「寝代り」「竹の子」「鈍太郎」「瓜盗人」「伊文字」「鎌腹」「泊養」「不聞座頭」「鏡男」「二人袴」「千鳥」「宮城野」「宗論」「墨塗り」「靱猿」「皸り」「栗焼」「呼声」「業平餅」「薬水」「不毒」「縄ない」「茶坪」「地蔵舞」「舎弟」「弐人大名」）、河野本（「伯母ケ酒」「棒縛り」「釣針」「蚊角力」）といった春日庄作の周辺あるいは弟子によって筆録された狂言台本についても、同様の分析を行う。この場合も、必要に応じて、適宜関係諸機関に赴き、関連資料を調査・収集する。

(5) 以上の作業に基づく春日庄作自筆本、及びその他の台本所収曲の系統的位置づけと特質の解明に関する成果を研究論文にまとめ、本学紀要である『山口県立大学学術情報』(電子版)に発表する。

４．研究成果

(1) 平成 22 年度は、山口県立大学附属郷土文学資料センター所蔵の狂言台本であり、長州藩時代の狂言を書き留めたと考えられる江山本（江戸末期書写）を対象とし、そこに収められている曲目の系統的分析を行った。すなわち、所収曲 17 曲のうち９曲（「地蔵舞」「柑子」「八句連歌」「空腕」「文荷」「千鳥」「鐘ノ音」「蟹山伏」「朝比奈」）について、鷺流（仁右衛門派・伝右衛門派）の台本、及び大蔵流・和泉流等の他流の主要な台本（その他、諸機関で調査・収集した関連資料も必要に応じて使用）を網羅的に参照しつつ、要点を比較していくことで、各曲目を系統的に位置づける作業を行った。その結果、それらの曲は、おおむね鷺伝右衛門派の特徴をもつものの、曲目によっては、他の伝右衛門派台本（江戸を拠点にした役者が書き残したもの）との相違が見られることが判明した。

以上の成果を研究論文「山口鷺流の位置（上）―江山本所収曲をめぐって―」にまとめ、『山口県立大学国際文化学部紀要』17 号（電子版『山口県立大学学術情報』４号所収）に発表した。また、研究成果は、依頼による講演「山口鷺流の歴史と特色」（能楽学会第 15 回フォーラム、2010 年６月 26 日）に生かすことができた。

(2) 平成 23 年度は、22 年度に引き続き、江山本所収曲のうち、残りの８曲（「八尾」「節分」「神鳴」「梟」「苞山伏」「抜から」「祢宜山伏」「柿山伏」）の系統的分析を前述の方法により継続した。その結果、その８曲の中にも、中央の鷺伝右衛門派台本とは異なる詞章や演出を有する曲目があることが判明した。前年度の成果と合わせてまとめると、

①大蔵流の台本に近い例（「柑子」の【六波羅の秀句】、「八句連歌」）の【連歌（第三句）】、「空腕」の【主人の言いつけ】）。

②鷺流のもう１つの派である、鷺仁右衛門派台本に一致する例（「蟹山伏」の【蟹がかける謎】、「苞山伏」の【山伏の次第の詞章】）。

③鷺伝右衛門派に近いが、小異がある例（「梟」の【山伏の祈りの詞章】）。

④他流・他派の台本に見出されない、独自の詞章や演出が含まれる例（「八句連歌」の【連歌（第七・八句）】、「千鳥」の【仕方話（酒市の話）】、「節分」の【女が鬼の腰を打つ】場面）。

ということになる。以上の結果は、長州藩に伝わっていた鷺流の狂言が、中央の鷺伝右衛門派の詞章や演出の単純な継承では

なく、独自の工夫を加えた可能性があることを示すものである。

以上の成果を研究論文「山口鷺流の位置（下）―江山本所収曲をめぐって―」にまとめ、『山口県立大学国際文化学部紀要』18 号（電子版『山口県立大学学術情報』5 号所収）に発表した。また、この研究成果は、研究発表「鷺流の「古態」」（第 48 回藝能史研究會大会、2011 年６月５日）にも生かすことができた。

(3) 平成24年度は、山口に鷺流狂言を伝えた長州藩抱えの狂言役者・春日庄作（しゅんにちしょうさく）の自筆台本（山口鷺流狂言保存会及び山口県立大学附属郷土文学資料センター所蔵）に収められた35曲（重複あり）のうち、11曲（「首引」「弐人り袴」「清水」「輝り」「栗焼」「地蔵舞」「呼声」「二千石」「昆布売」「八句連歌」「鬼瓦」）について、それぞれの系統的分析を前述の方法により行った。その結果、それらは基本的に鷺伝右衛門派の特色を有するものの、曲目によっては、

①大蔵流の台本に近い例（「首引」の全体的詞章や演出、「弐人り袴」の全体的詞章や演出）。

②鷺伝右衛門派台本とは相違する部分の存する例（「清水」の【鬼になった太郎冠者の要求】、「呼声」の全体的演出）。

③他流・他派の台本に見出されない独自の詞章や演出が含まれる例（「輝り」の【狂歌（第一句及び第三句）】と【天神に誓う】場面）。

などが見出された。春日庄作が江戸において、10世鷺伝右衛門（寛太郎）に師事した事実は、山口県立大学附属郷土文学資料センター所蔵『鷺流狂言小舞仕方附　別冊第弐号』などの資料により、従来から知られていたが、このたびの分析によると、春日庄作が筆録した狂言は、必ずしも中央の鷺伝右衛門派台本の単純な継承ではなく、独自の工夫を加えたものが含まれていることが判明した。

以上の成果を研究論文「山口鷺流台本の系統（一）―春日庄作自筆本をめぐって―」にまとめ、『山口県立大学国際文化学部紀要』19号（電子版『山口県立大学学術情報』６号所収）に発表した。また、この研究成果は、依頼による講演「山口鷺流狂言の歴史と位置」（第７回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座、2012年12月8日）にも生かすことができた。

(4) 以上により、長州藩の狂言を継承したと考えられる山口鷺流狂言は、基本的に鷺伝右衛門派の系統を受け継ぐものであることが、ゆるぎのない事実として確定されるとともに、それらは必ずしも中央（江戸）の狂言の単純な継承ではなかったということが山口市に伝わる鷺流狂言台本の系統的分析を通して明らかになった。このことは、特に近世地方諸藩における狂言の実態の一端を解明したものであり、未解明の問題の多い近世能楽史の研究に対して、大いに資するところがあるものと思量する。

なお、上記の春日庄作自筆本に見られる独自の詞章・演出が春日庄作自身の工夫によるものか、長州藩としての工夫であるのかについては、今後の検討課題である。

(5) 今後は、春日庄作自筆本所収曲のうち、残りの曲（「大盤若」「水汲新発意」「業平餅」「金藤左衛門」「蝉」「武悪」「隠シ狸」「八句連歌」「清水」「栗焼」「土筆」「柿山伏」「地蔵舞」「シビレ」「呼ビ声」「物まね」「業平餅」「千鳥」「今参り」「参宮」「宮城野」「靱猿」「以呂波」「末広り」、以上重複あり）の系統的分析を継続するとともに、野田神社奉納狂言本（「颯果」「平六」「鞠座頭」「たけのこ」）、中西本（「鍋八ツ撥」「昆布売り」「凱旋」「首引」「雛聟」「呂蓮」「寝代り」「竹の子」「鈍太郎」「瓜盗人」「伊文字」「鎌腹」「泊養」「不聞座頭」「鏡男」「二人袴」「千鳥」「宮城野」「宗論」「墨塗り」「靱猿」「皸り」「栗焼」「呼声」「業平餅」「薬水」「不毒」「縄ない」「茶坪」「地蔵舞」「舎弟」「弐人大名」）、河野本（「伯母ケ酒」「棒縛り」「釣針」「蚊角力」等）など、山口市に伝存するその他の鷺流台本所収曲についても系統的分析を行い、それぞれの曲目の位置づけと特質の解明を行いたい。これらの作業によって、山口鷺流狂言全体の系統的位置づけと特質がより一層鮮明になり、そのことによって、山口鷺流のみならず、従来必ずしも自明ではなかった鷺伝右衛門派の狂言の特質を解明することにつながるものと確信する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①稲田秀雄、山口鷺流台本の系統（一）―春日庄作自筆本をめぐって―、山口県立大学国際文化学部紀要、査読無、19 号、2013、

１－17
②稲田秀雄、山口鷺流の位置（下）―江山本所収曲をめぐって―、山口県立大学国際文化学部紀要、査読無、18 号、2012、１－17
③稲田秀雄、山口鷺流の位置（上）―江山本所収曲をめぐって―、山口県立大学国際文化学部紀要、査読無、17 号、2011、13－27

〔学会発表〕（計３件）
①稲田秀雄、山口鷺流狂言の歴史と位置、第７回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座、2012 年 12 月 8 日、東京国立博物館（東京都）
②稲田秀雄、鷺流の「古態」、第 48 回藝能史研究會大会、2011 年 6 月 5 日、同志社女子大学（京都市）
③稲田秀雄、山口鷺流の歴史と特色、能楽学会第 15 回フォーラム、2010 年 6 月 26 日、大江能楽堂（京都市）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.l.yamaguchi-pu.ac.jp/archives/2013

http://www.l.yamaguchi-pu.ac.jp/archives/2012

http://www.l.yamaguchi-pu.ac.jp/archives/2011

６．研究組織
(1)研究代表者
稲田　秀雄（INADA　HIDEO）
山口県立大学・国際文化学部・教授
研究者番号：80264969

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：